資料２

第１回高松市創造都市推進審議会　摘録

日時　平成２４年月９月３０日（日）午後２時～４時
場所　高松市役所　１３階　大会議室
出席　委　員：佐々木、荒木、大久保、木村、中、中西、原田、三井、小西、
　　橋本、三矢、薮内、大西、瀧澤、徳増、広野、松山
　　高松市：大西市長、宮武、松本、秋山部長、米山、長井、永正、上枝、
　　佐野、溝渕、高田、八杉
　　アルパック：森岡、江藤

資料　１　高松市創造都市推進審議会委員名簿
　　２　高松市創造都市推進審議会条例
　　３　講演資料「創造都市とはなにか～目指すべき姿と世界潮流～」
　　４　国内他都市の創造都市に向けた取組
　　５　創造都市推進ビジョン策定スケジュール
　　参考資料　まちづくり戦略計画の体系

１．開会

２．市長挨拶

市　長ｏ委員の皆様方には、日ごろから市政各般にわたり、なにかとご理解・ご協力いただいている。改めて感謝御礼を申し上げる。

ｏ創造都市推進のための審議会にお集まりいただいたが、私は２期目の選挙にあたり、マニフェストのテーマとして高松市の未来像を「創造性豊かな海園・田園・人間都市へ」と定め、それに向かって高松市の各種施策を推進している。この意図するところは、高松市の中心市街地を核とし、瀬戸内海に浮かぶ島嶼部やウォーターフロント、また郊外部の田園部が機能的に融合し、都市的な利便性と潤いのある海や田園の穏やかさがともに享受でき人々が幸せを感じられる人間中心の都市のことである。いわば「高松らしい創造都市」と言えるものである。この「創造性豊かな海園・田園・人間都市へ」のテーマのもと、創造都市の実現を目指すことにより、「瀬戸の都・高松」の魅力を国内外へさらに活発に広く発信し、知名度を高めていきたい。

ｏ４月からは創造都市推進局を中核的推進組織として設置した。この創造都市推進局で、産業、モノづくり、国際交流、観光、文化芸術、スポーツの各分野の施策を一緒に取り組むことにより、有機的に連携させ「高松」の都市ブランドを確立

し、総合的かつ効果的にシティプロモーションを行っていきたい。また、本市のプロモーションを行いながら、対外的な知名度・イメージアップを図ることにより、それをフィードバックして市民の皆様の地元高松に対する誇りや郷土愛をより根付かせ、さらにより市民の皆様が自主的なまちづくりへの参画や、まちの発展・飛躍に貢献に対する動きがさらに活発になると期待する。観光客が増えることによってそれを受け入れる市民のホスピタリティの精神がより強まるなど、好循環を作っていきたい。一過性でなく、持続的にまちが発展していくような環境を創出していきたい。このような循環型のシティプロモーションの展開によって、観光や農業なども含めた産業の振興が図られ、地域活性化や経済基盤の安定につながっていくのではないか。

ｏ高松ならではの創造都市の実現を目指すに当たり、どのような施策をどのように組み合わせて推進していくか、そのための計画ビジョン「高松市創造都市推進ビジョン」を策定したい。「高松市創造都市推進ビジョン」の策定につき、これまでの経験や知識をもとに専門的かつ多面的な視点からそのビジョンに盛り込む項目や内容について、ご助言や忌憚のないご意見を賜りたい。委員の皆様の活発なご議論、より良いビジョンの策定等をご期待して、ご挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

３．委嘱状の交付

４．自己紹介

佐々木ｏ私は自宅が京都であり、本日は中止と思っていたが、皆様の熱意が台風を遠ざけたとお聞きし、心強く思っている。

荒　木ｏ私は香川県の伝統工芸品の讃岐かがり手まりを作ったり伝えたりしている。私がこういう場所でどういう意見が言えるか心配だが、思っていることを皆様に伝えたい。

大久保ｏ高松の東、庵治で石屋をやっている。４００年以上続く産業だが、昨今名前も落ちてきている。それを挽回すべく、一昨年映画を撮り、昨年はお芝居をした。映画のほうは来春全国公開になる。高松市でプロモーションをしている。

木　村ｏ今日の肩書は中小企業家同友会の理事として参加している。仕事は、高松市の北浜町でＮＹギャラリーという、昔の穀物倉庫を改装した中で、花屋とカフェをしている。

中　ｏ高松商工会議所の副会頭として参加している。仕事は中商事株式会社というところで、繊維の卸の仕事をしている。それ以外にもレストランを経営している。

中　西ｏ鬼無で盆栽を営んでいる。少しこの場をお借りして御礼を申し上げたい。昨年、

アジア太平洋盆栽水石大会アスパック高松において、今日ご参加の皆様や周りの多方面の方にご協力、ご指導いただき、この四国・高松に、全国、世界各国から、盆栽を鑑賞しに、感動しにいただき、癒しのひと時を体験していただけた。本当にありがとうございました。大会については、官民一体で、行政並びに私たち委員会がともに誘致から運営まで取り組み、本当にスムーズに進み、また多角的に物事が進んできた。心残りは、大会に対して、総括・検証がまだできてないところである。自分の中の問題点・反省点など、いろいろ財産と思っており、それをぜひこの会議でも活かしていきたい。

原　田ｏ私は高松市中山町勝賀山の山麓で、柑橘を２ヘクタールほど栽培している、柑橘の専業農家である。今日は高松市の農業振興協議会の立場で参加させていただいている。また、高松市の農業委員も務めており、農業の代表として参加させていただく。

三　井ｏＮＰＯ法人アーキペラゴという団体の理事長をしている。アートで飯が食えるのかということが私の問題意識であり、瀬戸内国際芸術祭が始まるのをきっかけに会社を辞め、「こえび隊」を設立した。皆様のご協力のもとに第一回が大成功し、こえび隊の彼女たちは自立して、別のＮＰＯとして４月に独立した。今年は１１月に瀬戸内生活工芸祭というクラフトフェアを開催することになり、目下その作戦に帆走中である。手に職があるアーティスト系の方々が、高松というところに魅力を感じ、できれば根付いて、そこで仕事が生まれるようなまちにしていきたい。

松　山ｏ公募という形で、どの立場といったものはないが、高松中央商店街の中にライオン通商店街という通りがあり、そこの理事長をしている。理事長になって５年ぐらいになるが、私の目標は、人にやさしい安心安全のまちづくりである。それをモットーに取り組んでいるが、その間にも景気はいろいろ浮き沈みがあり、現在は沈みっぱなしである。しかし心豊かに皆様が暮らしていける高松市を考えて、応募させていただいた。

広　野ｏ私は高松市の主婦の代表として、今日は参加させていただきたい。私の主人は三木町のほうで、広野牧場を経営している。私自身も野菜ソムリエの資格を持っており、普段から小学校や幼稚園へ行って食育活動をしている。主人とともに農業の発展や子どもが住みやすいまちづくりに取り組んでいる。また、香川県は野菜摂取量ワースト１の県であり、もっとみなさんに野菜を食べていただけるような活動をしている。

徳　増ｏこの委員に応募した理由は、ある書店で佐々木先生の本を読み、これはどうしても勉強しようと思ったからである。また、今第２の人生を歩んでおり、色々なことに興味を持って、いろいろな意見を言わせてもらいたい。まず興味・好奇心を

持って、なんでも学ぶということで参加させていただく。

瀧　澤ｏ私は本当に何も肩書のない人間で、生まれも育ちも高松出身の市民の代表として、皆さんの意見を伺ったり、その中で自分の考えが言えたりしたらいいなと思って参加させていただいた。

大　西ｏ高松市体育協会の大西です。生涯スポーツが叫ばれているが、なかなか振興が進んでいないというのが現状である。心の健康と体の健康の両輪で、審議会で意見を言いたい。

薮　内ｏ塩江町でホテルセカンドステージというホテルの運営に関わっている。開業当時から、塩江の自然を生かした体験型のホテルを皆でやっていこうとなったが、最初の３年間は、お客様も体験をご希望される方がいらっしゃらなくて、うちのホテルはどうなるのかと思った。しかし昨年あたりから、ホテルに泊まってうどん打ちをし、地域の方とふれあいながら竹細工をされて喜んで帰って行かれる方が増えて、着地型観光を実際に感じている。高松は、観光素材がまだまだたくさんあり、そういった立場で意見を言わせていただきたい。

三　矢ｏ山の上で旅館をやっている。今日は観光という分野で参加をさせていただくが、皆様方に全て共通した項目ばかりであり、広く皆様のご意見をお聞きしたい。この創造都市推進審議会と合わせて、５年ぶりに高松の観光振興計画の見直しが行われている。そちらの委員長も務めており、貴重な意見をいろいろお聞きして、そちらにも生かしていきたい。

橋　本ｏ善通寺にある四国学院大学で教員をしている。生まれは高松市であり、６０数年高松市民として生活をさせていただいている。高松が、文化・芸術でもう少し楽しい場所になればいいかなと思い、いろいろな活動をしている。この場でも、いろいろなご意見を拝聴しながら考えていきたい。

小　西ｏトキワ新町で ROOTS BOOKS という小さな出版社をしている。地元の人が、地元をどう外に発信するかということが自分のテーマである。現在は、高松も含め香川の島の情報を伝える『せとうち暮らし』という情報誌を地元に住む方々と一緒に作っています。島に通うようになったのは、高松市の移住交流事業というものに関わったことがきっかけである。島の方からすれば、高松の人はよそ者であり、高松の方からすれば、島の人は同じ市民でありながらある種よそ者であり、そこに島に移住される方・転勤族の方など、よそ者の人たちと違う人たちをどうつなげていったらいいのか、そのためにどういう情報やロケーションが必要だったりするのか、など日々模索している。

事務局ｏ植松由佳委員、佃昌道委員、西成典久委員は、本日欠席のご連絡を頂いている。委員は２０人の皆様である。

５．会長および副会長の選出

会　長ｏこのような形で審議会をお作りになられて、大変高い志を持たれているなと思っている。全国いろいろな都市が計画づくりをしているが、２０名の審議員を集めて２年間議論するという構えは、大変本格的であり、創造的である。

副会長ｏ今日は少し曇っているが、目の前には本来女木島が見える。女木島から見る高松の素晴らしさは、見た者にしか分からない。特に夜の高松の輝きというものは、どこの地域に行っても、こんな素晴らしいものはないと考えている。ぜひ今回のこの創造都市推進審議会が光り輝く高松を作る力になればと思い、また、その助けとして副会長として少しでも力になればと思う。

６．諮問

７．講演（要旨）

佐々木雅幸氏（大阪市立大学大学院創造都市研究科教授）

演題「創造都市とはなにか～目指す姿と世界潮流～」

【創造都市の定義】

佐々木ｏ創造都市とはなにか、簡単に一言でいうと、市民一人一人が創造的に働き暮らし、活動できる都市のこと。市民一人一人が創造的でなければならない。高松市は今年４月に創造都市推進局を作り、取組を進めている。

【スペイン・バルセロナの事例】

佐々木ｏ世界の創造都市の事例について紹介する。スペインは国家破産しているが、都市は大変元気である。特にバルセロナには、ガウディが作った奇妙な建物が街中にある。ガウディの建物の特徴は、動物など、命のあるものをモチーフにしてあることである。近代的なビルディングは必ず直線的であるのに対し、ガウディの作品は直線でなく曲線である。なぜ曲線かというと、人間の体、命あるものは必ず曲線でできており、直線の部分は決してない。その想いから、街全体が命あふれるようにしようとしている。ピカソ、ダリ、ミロなど現代アートにつながる大巨匠はこの街からでてきた。

ｏこの街は１９８０年代～９０年代にかけて都市再生に取り組んだ時に、最初に、街の中にたくさんの公共広場を作った。大きな置物を置くことで子どもたちがあっと驚く、集まってきてざわざわ騒ぐ。アートの力でざわざわと騒々しい（創造しい）広場が生まれる、これが創造都市の作り方の一つである。創造の場をたくさん作ると、次第に大人たちも集まってきて、創造的な討論が生まれる。このよ

うに街の中に創造の場をたくさん作ってできたのがバルセロナという街である。

【フランス・ナントの事例】

佐々木ｏ２００４年以降、世界に向けて、アートの力で衝突（戦争・テロなど）を乗り越えていこうという試みがされている。フランスでは、大統領のオランド氏が首相にエーロ氏を指名した。エーロ氏が２０数年前、３９歳で市長になったのがナントという街である。当時のナントは造船業が衰退し、失業者が多く出た。そこでエーロ市長は、これからは産業でなく、芸術で街を再生しようとした。

ｏ文化予算を市予算全体の１０数％に引き上げて、あちこちから芸術家や大道芸人や文化のマネージャーを集めた。また、その時にビスケット工場跡地を劇場（リュー・ユニーク）に換え、世界中から人を集めた。

ｏさらに音楽プロデューサーのルネ・マルタン氏を呼んで、子どもが騒いでも大丈夫な型破りのクラシックコンサート（ラ・フォル・ジュルネ）を始めた。４５分で１つのプログラムが終わる短時間コンサートを低価格で提供している。これは大ヒットし、世界中に普及し、日本にも浸透した。

ｏまた、大道芸の劇団ロワイヤル・ド・リュクスを街中へ引っ張り出して、劇場でなくても街中で見られる大道芸を生み出した。

【イギリスの事例】

佐々木ｏイギリスでは、産業革命で栄えたバーミンガムが創造都市として有名である。製造業は世界中で今姿を消していっているが、それに代わりアートが良いとされてきている。工業製品などを運んだかつての運河を観光地にして、街の中に様々なアートを持ち込んでいる。そのようにしてバーミンガムはまた元気になってきている。

ｏこのように、文化芸術の力で様々な都市再生が実を結んできている。Ｃ．ランドリーは創造都市を Creative City と呼んでいる。ランドリーの言う Creative City を参考にして、当時のイギリス政府・ブレア元首相は、「Creative for the future」（将来に向かって創造性を伸ばすこと）を国の方針とした。

ｏクリエイティブな産業群を政府として指定し、それを集中的に伸ばそうとした。政府が創造産業として指定したのは１３業種である。イギリスの得意とするデザインや音楽も含まれる。ビートルズに代表されるように、音楽は若者の雇用・輸出にもつながる大事な産業である。文化芸術が若者の雇用を生む、それは都市の再生につながる、という考え方が世界的に広がっている。

ｏ先日開催されたロンドン五輪は、五輪招致の際にパリと競っていた。ロンドンが決戦で勝った決め手として挙げられたのが、ロンドンが芸術的に復活したという

ことである。８年間の Creative London の取組がパリに勝った要因とも言える。また、五輪の開閉会式には必ずカルチュラルプログラムが組み込まれていて、アートの祭典となってきている。単にスポーツの祭典ではない。

【アメリカの事例】

佐々木ｏアメリカでは、Ｒ．フロリダの出身地であるピッツバーグは、アメリカで一番古い製造業が集まっていた街であり、失業者が多く、工場どんどん減っていった。そうした中、Ｒ．フロリダは、新しい産業はゲイやレズビアンが集まる都市に発展していく、ということに気付いた。アメリカ社会において、ゲイ・レズビアンは社会指標として注目されている。

ｏ前回の大統領選挙でも、オバマ大統領は同性者の結婚認めるが、ブッシュ前大統領は絶対認めなかった。ブッシュがキリスト原理主義者であるのに対し、オバマは寛容性が高く、故にアーティストやクリエイティブな人々の支持集めることにつながった。つまり、これからの社会は寛容性が高いコミュニティに人々が集まるということである。

ｏＲ．フロリダは、アメリカで最も素晴らしい創造都市は、サンフランシスコであると考える。ゲイ同士の結婚を一番に認めた都市だからである。サンフランシスコから南に行ったところにシリコンバレーがある。シリコンバレーのハイテク技術者たちはサンフランシスコ一帯の寛容的な雰囲気の中で新しいアイデアを生み出した。

【国連による創造都市の取組】

佐々木ｏそのような流れの中で、ユネスコが創造都市のネットワークを作ったらどうかと提唱した。世界には宗教や文化・芸術があり、これがお互い摩擦を起こさないように、win-win に発展するように、文化多様性（違いを認めあって、それぞれが発展する道を探ろう）という考えを採ることとし、創造都市を世界中に広げる音頭を取ることとなった。

ｏ現在７つの文化・産業の分野で、世界に３４の都市が創造都市として広がっている。日本では、神戸・名古屋・金沢が創造都市ネットワークに入っている。昨年１１月には世界会議が行われた。

ｏこのように国連の機関で、創造都市を応援するようになり、ＵＮＣＴＡＤ（国連貿易開発会議）でも、創造経済というレポートを２００８年と２０１０年に出しており、創造都市の取組は、現在、途上国にも広がりを見せている。２０世紀は工業経済の時代で、都市の発展は大きな工場が集まり、大規模生産が行われることによって伸びるとされた。しかし今、そのような工場はどんどん途上国に行っ

ており、大量生産型の経済は先進国に向かなくなってきた。先進国の今は創造経済、その担い手はクリエイティブな都市、すなわち Creative City である。

【イタリア・ボローニャの事例】

佐々木ｏ高松市がモデルにしたら良いと思う都市の１つが、イタリアのボローニャである。

ｏ井上ひさしの『ボローニャ紀行』によると、イタリアの歴史都市は、必ず街の中心部にオペラハウスがある。ボローニャの場合、テアトロ・コムナーレ・ボローニャという由緒あるオペラハウスがあり、ヴェルディやロッシーニを輩出した。１年留学をした際に感じたのは、職人もオペラをしているということ。イタリア語のオペラには“仕事”という意味がある。職人が、自分のアイデアに基づいて、自分の手で作った創造的な仕事、という意味である。イタリア語では、誰かに言われて指図通り嫌々やる仕事をラボーロという。ラボーロとオペラは正反対の意味である。コラボレーションという言葉は、ラボーロ（嫌な仕事）を一緒にやるという意味である。街の中にはたくさんの伝統職人が毎日オペラをしている。伝統的オペラもあれば現代的なオペラ（オートバイなどの小さな部品）もある。ドゥカティやフェラーリ（隣町）が代表的であり、少量生産だが高級な製造品をつくることで経済が回っている。これらの部品は職人が手づくりしている。

ｏボローニャは、音楽都市として、ユネスコの創造都市ネットワークにおいて重要な役割を担っている。オペラを皆と一緒にやるという言葉がコー・オペラ＝共同組合である。消費生協をコープというが、コー・オペラを略した言葉である。

【アメリカ・サンタフェの事例】

佐々木ｏアメリカにサンタフェ（人口６万５千人）という高松市よりも小さな街がある。ここでもオペラがあり、クラフトを現代的なアーティストと一緒になって作っている。この街から出てきた提案が、これからは大量生産型の旅行業、つまりマス・ツーリズムでは駄目であり、クリエイティブ・ツーリズム（＝他の都市でできないような、クリエイティブな体験や交流ができる、質の高いツーリズム）が、これから発展する方向性であるということ。

ｏクリエイティブ・ツーリズムは２００８年にユネスコの創造都市ネットワークで提唱され、金沢市はこの考えに基づき、独自のクラフト・ツーリズムを展開している。

【金沢市の事例】

佐々木ｏこのように、ユネスコが創造都市をネットワークし、我が国もなんとか創造都市を応援しようと、青木保氏が文化庁長官をしている時に、創造都市を進める都市

を称えるために長官表彰を作った。

- 国内では、最初に創造都市の取り組みを街の中で始めたのは金沢市である。金沢市長はまず１９９５年に「金沢世界都市構想」を打ち出し、次に創造都市という考え方に転換して行った。
- ２００１年に金沢経済同友会が４０周年事業として創造都市会議を提唱した。非戦災都市として、加賀藩時代の様々な文化財が残っており、文化財を保護するという点でも実績がある。街並みの保全についても、独自のやり方で、伝統環境保存条例、美しい景観の形成に関する条例など、次々と条例を制定していった。国のやり方では金沢市の個性を守れない、国が規制緩和というと街中にとんでもない建物が建ってしまう、金沢市を守るためには、自分たちで条例を作って形にしていかないといけない、と当時の山根市長は考えた。日本の地方都市の中で最も多数の条例を持っているのはおそらく金沢市である。こうして金沢市は個性的な景観を維持している。
- 回転寿司のコンベアは世界で２つの企業のみ製造しており、その１つが金沢である（もう１つも金沢の隣り）。また、金沢市の金箔工芸から、箔打ち紙を化粧品（油とり紙）として作り出した。産業の発展の基礎に必ず「文化」資本がある。新しい産業が生まれるとき、金沢市の文化資本が、アイデアの発想、あるいは関連産業の裾野にあって、「文化」というものがより豊かで、現代アートから伝統文化まで幅が広いほど、産業的に支えるものが生まれる、という仮説を私は持っている。
- これからの都市に必要なのは、“文化資本を豊かにすること”。つまりクリエイティブな人が集まる都市（＝文化的に非常に多様で恵まれている都市）にしなければならないということでもある。とすれば、文化政策・芸術の分野を都市政策の中で戦略的に位置づけなければならない。
- 創造都市を検討する際には必ず、文化・芸術で活躍している方々、アーティスト、職人の方々に入ってもらうのが好ましい。この審議会でもそのような方々に委員に入ってもらっている。
- 金沢２１世紀美術館（２００４年開館)、これは全く新しいタイプの美術館であったので、金沢の街に現代アートは似合わないと考える地元の人間国宝の先生方は大反対だった。そこで市長は「伝統は確かに大事だが、伝統だけでは 100 年先の金沢はできない。現代の最先端のアートを子どもたちが開拓し、その子どもたちが新しい伝統をつくる。だから現代の最先端が分かる新しい美術館にしたい」ということでこの美術館を造ることにした。また、紡績工場を改修した市民のアートセンターである金沢市民芸術村は３６５日２４時間稼働している。これは、“人間の精神活動のピークは真夜中にある、そのピークの時に使えないような場所では創造的なものは生まれない”という考えに基づいている。金沢は２１世紀美術

館をはじめとして、たくさんの種類の美術館・博物館がある。さらにこれら美術館の周りにたくさんの工芸ショップやアトリエがある。たくさんの美術館と工芸ショップなどによって街が落ち着いてくるし、独自の景観が生まれる。ユネスコの創造都市ネットワークでは、クラフトの分野で認定された。現在では、モノづくりをクラフトイズムという形で提唱している。

【国内他都市の事例】

佐々木ｏこの金沢のやり方を横目に見ながら、横浜は２００４年にクリエイティブシティ・ヨコハマ構想を掲げ、現代アートの芸術祭をはじめた。創造都市事業本部を作り、やる気のある職員を集め、横浜の倉庫群を“創造界隈”という形で展開した。

ｏ神戸も震災１０年を機に、「文化創生都市」を宣言し、芸術文化を活かしていきいきと進化するまちづくりを目指すことにし、デザインを街のなかに展開することにした。２０１２年１０月には旧生糸検査所をクリエイティブ・デザインセンター（ＫＩＩＴＯ）としてオープンする。

ｏ都市だけでなく、農村部でも創造都市を農村に生かす“創造農村”を展開している。長野県木曽町、山形県鶴岡市、丹波篠山などが挙げられる。鶴岡市ではカリスマイタリアンシェフが地元の食材である在来野菜（７０種類）を使っている。これまで市場に出ていなかった在来野菜を使うことで、農業の持続にもつながっている。

【創造都市に取り組むポイント】

佐々木ｏ創造都市をつくる３つのポイントがある

①芸術文化の創造性を都市の将来構想の中心において、そのまわりに産業・雇用・教育・医療など多面的に配置する。

②市長のリーダーシップをもとに創造都市事業推進局を設置する。

③芸術・文化の専門委員会、アートコミッション、市民会議などを設置することが好ましい。

ｏつまり、行政と市民の両輪で創造都市をつくることが重要である。ぜひ高松市では、海園と田園をつなぐ新しいタイプの創造都市を目指してビジョンを作ることが好ましい。

８．議題

三　井ｏ島嶼部の女木島・男木島は瀬戸内国際芸術祭で舞台になり非常に注目された。しかし注目されたことで、コミュニティが右往左往している。家並み・街並みが、

過疎化もあり、どんどん壊れている。同時に新しい買い手が登場しつつある。いくつかの物件を市外の方々が押さえるということが起こっている。放っておくと頓珍漢な利用が始まる。早い段階で島ごとの、文化的景観を守る「島づくり条例」のようなコンセンサスを、島外のメンバーも入って少しずつ策定していく。お金だけを持って土地購入した人々に、できないことをルール化するにも条例づくりを早急に進めたい。

佐々木ｏ「文化的景観」はユネスコも無形文化財に位置づけ、国内でも保全の枠組みができつつある。創造都市、創造農村を考える際に景観は大切な要素である。地区指定のようなものを含め、検討し、ぜひ盛り込んでいきたい。

徳　増ｏ創造は、現状を見直し再生をすることにつながると思う。特に高松市においては栗林公園、屋島など恵まれた観光資源があるが、そのわりには“再生”という段階までは至っていないようにも感じるので、創造都市のもと取り組んでいきたい。

ｏ地場産業はまさに再生につながるのではないか。モノづくりをもう一度掘り返して雇用や地域の再生にもつなげていきたい。

佐々木ｏ景観の話と重なるが、ヨーロッパではアグリツーリズムとして、農村景観、歴史的景観を保存してそれを訪ね歩くということを基本にしている。例えば、そこにブドウ農家が絡みワインツーリズムは始まる。高松市は周辺の自然景観を含め恵まれた資源が多いので、きちんと自然を保存し、歴史的なものも保存し、雇用や観光につなげていく計画にしていきたい。

佐々木ｏモノづくりに関しては、先般、担当課が金沢市を訪ね調査をしているので、何か補足することあればお願いする。

事務局ｏモノづくりに関しては、条例を制定するつもりであり現在進めているところである。金沢市などとも比較し、高松市にあったものを制定する予定である。

徳　増ｏ以前仕事の関係で金沢は何度も行ったことがある。金沢市を美術館、町並等、実際に散策して思ったのだが、高松市にも同じものがある。高松市もぜひ創造都市になっていただきたい。

佐々木ｏ市民の合意が重要になってくる。高松市については私も知らないことが多いので一緒にやっていきたい。

小　西ｏ創造的な都市について考える場所（審議会）のはずだが、考える場所が創造的でないというのが気になる。この審議会形式で様々な委員が参加しているが、このスケジュールの中でどれだけ委員の方の想いを聞いて、最終的なビジョンにつながって行くのか？審議の進め方の中に一工夫必要である。

ｏ創造都市を実現するには、絵に描いた餅である理想を求めてつくったところで、実際暮らしている高松市民に根付かないと掲げたスローガンだけで終わってしまう。他都市を訪れると、市民の人々が心底楽しんで取り組まないとごまかしが効

かない。観光ビジョンのような外向きの顔でなく、ある種の民意が問われるようなビジョンにしていかないと効力を持たない気がする。

o まずはこの場にいる委員がそのようなコミュニケーションをしていかないと、その他多くの市民に伝ることは難しい。佐々木先生は様々な都市で創造都市の取組を進めているので、創造的な議論をするうえで有効な手法やワークショップの方法があればぜひ教えていただきたい。

佐々木 o 金沢市では、経済同友会が創造都市会議と金沢学会というものを隔年開催し、様々なゲストを国内海外から招いて、いくつかの実験プロジェクトに取り組んでいる。1年間実験に取り組み、うまくいったら行政がそれを施策にする。上手くいかなかったらやめる。という小さな実験を繰り返している。それを続けることでアイデアが関係者に浸透していく。

o 新潟でも創造都市の取組が行われているが、会議の場所を毎回変えている。お庭のきれいな古い建物であったり、工場跡を改装したギャラリーだとか、いくつか創造的だと思われる場で議論をすると議論の進み方が変わってきたりする。

o 今回、審議会は各回のトップが集っているが、その周辺にU―４０など若い人々の意見を聞く場も設けている。さらに周辺にU―２０などがあってもいい。センターで議論するよりもフリンジ（周辺）の方がクリエイティブな議論になりやすい。

o 行政が難しければ、民間で取組んでいく。実験しながら施策づくりを進めるという方法もある。

木　村 o 趣味やライフスタイルが多様化しているが、最終的な“幸せ”というものは共通していると思う。現代アートが好きな人もいれば古い芸術が好きな人もいる。野菜好きな人も、魚好きな人も、好みは違うけれど、最終的に味わう“幸せ感”は同じである。どういうことが幸せなのか、創造都市が目指す「高松市の幸せ感」を最初に決めたら、各地域の個性（文化や歴史）を活かし、尊重しながら「地域らしい幸せ」を目指せるのではないか。

o また、次世代が創造都市を目指せるように、今のクリエイティブな方々が、子ども時代に何がきっかけでそういう人になったか、というところを深掘りしたらどうか。次の新しい高松を作るクリエイティブ人材の育成、幼児教育に参考になるのではないか。

佐々木 o ＧＤＰ（国内総生産）に代わって、市民の幸福度（＝ＧＮＨ：新しい指標）を上げることが創造都市の目標となりうる。この指標は非常に多様性に富むが、幸せということで共通認識になる。高松市民にとって今より幸せな状態、創造的な状態は端的に言えばどのようなことか？分かりやすく幾つかのシンボルで示せると面白い。計画づくりの時に指標をどう選ぶかということは非常に大事である。

大久保ｏ石の現場を歩く取組みをしているが、ここからがアートでここから先はアートでない、という線引きをしないようにしなければならない。見る人も感じ方はそれぞれであり、そのためのインフラ整備も必要になってくる。イベントなどをやるときも、自分たちの感性で「これはいい」と判断できるようにする。

ｏ地場産業として持続可能であることは、商品になってお金が入ってくる、それを見た息子が「父ちゃんかっこいい、俺も継いでいく」となって次の世代に受け継がれていく。この鎖がつながっていかないと持続可能にならない。

ｏテレビコマーシャルなど大規模な仕掛けによって「良い商品」と感じるのでなく、自分の目で見て「家に置きたい」「食べてみたい」という感性をみがき、地に足がついた展開が必要である。

佐々木ｏこれまでの東京発の大規模なメディア発信は大きく変わっている。ソーシャルネットワーク等の進歩によって、今やどこにいても誰でもつぶやけるし、発信できるし、世界とつながれる。本物の価値があればあるだけクリエイティブな人たちが集まって来る時代になっている。

中　西ｏ盆栽は世界中で認められている。ヨーロッパをはじめ、アメリカなどにも取引があるが、タイのバンコクでは盆栽愛好家は８割方ゲイである。またタイの会社社長さんもゲイが多い。コミュニケーションが上手く、寛容であるなど、色々な意味でゲイの方々はあらゆる能力を持っていると思った。

ｏ犬島の製錬所の跡地が非常に人間の鼓動を打っている様だったので、このような空間で盆栽の展示会をやってみたいとインスピレーションを感じた。高松市内にもあのような魅力的な空間があれば良い。

ｏ話の中で教育の話題が出たが、芸術は小さな頃から教育の一環として感じたり、見せたりすることが非常に大事だと感じた。感受性豊かな子どもを育てれば盆栽にも興味を持ってもらえるのではないか。

佐々木ｏイタリアのボローニャにいた頃、イタリア人も盆栽に興味津々だった。その盆栽の過半が高松で生産されていると聞いて驚いたのを覚えている。これからは「高松の盆栽」といったブランド力が重要になり、盆栽高松という風に結び付けて発信すれば強い発信力を発揮するのではと思った。

ｏ私も過去、オーストラリアの友人と『盆栽オーストラリア万歳』という本を出した。オーストラリア人も盆栽を素晴らしさを理解している。盆栽が国際標準であることの表れである。

中　ｏ先生のお話を伺って、情報の発信力をどうもっていくか、テーマをどのように設定するのかが一番重要だと感じた。例えば、玉藻公園では薪能が行われている。まちなかでは大道芸大会が催され、会場になっている百十四銀行の本店は外壁が丸いタイルで覆われている日本でも珍しい建築であるが誰も気づいていない。

もっとトータル的な発信力があれば、今の高松市でも創造都市に近いのではないかと痛感している。トータルな発信力は創造都市の第一歩であり、また最終到達点ではないか。

佐々木ｏ発信するコンテンツが多すぎると絞り込めない。重要なのは編集能力である。その編集能力も、大手広告代理店のような外部の編集者が編集するのではなく、地元のクリエイティブな力を使うのがいいのではないか。

大　西ｏ高松市の市報を若い人はあまり読まない。

ｏ体育スポーツ分野から参加しているが、議論が芸術の方向に向かうことを危惧する。創造都市を考えると様々な分野が関係してくる。これからの高松市はどのような方向に向かうのか、今現在の高松市が抱える問題点について考える必要があり、今の高松市のいいところを伸ばす必要もある。財政的にも逼迫しているので、なるべくお金を使わないでやっていく必要もある。

ｏ次回には、高松市が抱える問題点や良いところについてざっくばらんに話し合えるようにしていただきたい。先進県や先進都市だけを見て議論するだけでなく、高松市の現状にもっと目を向けることも大事である。

佐々木ｏ高松市が関わる問題点から出発し、どのように創造的に解決していくのかが本来の創造都市の姿である。どの町も産業の空洞化に苦しみ、失業者をたくさん出て、これからどうしていくのか？そこが出発点だった。過去の文化財がしっかり残っているが、現在の産業は衰退している。そのギャップをどう乗り越えたらいいのか、ということを考えたらいい。アイデアを含めて、創造的な議論の場も含めて、創造的に乗り越えられる方法を見つけていくために議論できたらいい。

三　矢ｏ高松市には宝物、素材が何でもある。伝統産業も観光資源も豊富にある。しかし、屋島はかつて２４０万人が訪れたが、今は５０万人を切っている。漆器も本来、金沢に負けていない。私は金沢をよく訪れるが、２１世紀美術館を見ると「こういうまちにする」といった金沢市長の決断力が感じられる。

ｏ編集能力は本当に必要である。あわせて多少リスクがあっても思い切って大胆にやって欲しい。今までもこのような審議会や会議にいくつも出てきたが、あまり変わってこなかった。

佐々木ｏ金沢の成功は経済同友会が決断したことにある。経済同友会がリスクを取った。高松市も頑張って欲しい。失敗を恐れないことが重要で、他の町でやったことを真似しても上手くいかない。

ｏ丸亀町商店街のような成功事例もあり、高松らしい取組み方法を探していくと、地元の人の知恵とエネルギーがうまく編集されて合わさった時に流れができる。

ｏ審議会は何か絵を描いて終りではく、小さな実験を積み重ね、検証してまた次につなげる。それは行政だけがやるという仕事ではなくて、民間もリスクを取って

進めていく、両輪が必要ではないか。

原　田ｏ農業を代表して出席しているので文化芸術に偏らないよう発言する。高松市は良い農産物がたくさんあり、発信もしているが、なかなか伝わらないというのが現状である。名刺に１日果物 200 グラム運動というマークを入れ、高松市だけでなく全国で推進しているが、キャンペーンをしても広まらない、担当者の自己満足で終わってしまう。どうやってうまく伝えていくかに日々悩んでいる。

佐々木ｏこの委員会は芸術文化の委員会ではない。現代アートの力をうまく活用して農業も創造的にする。スポーツも創造的にする。そしてその最終目的は“みんなが幸せになるために”今抱えている課題をどう創造的に解決していくのか？ということ。そのための実験の場を農業で提供してみても良い。スポーツの分野で提供するのも良い。アイデアと実験の場をこの審議会で提供して欲しい。

９．閉会

（以上）